fromスイス◉中 東生
Shinobu Naka

アラーニャとクルザクのリサイタル

先月のレポートでは「真のオペラ歌手」としてサビーヌ・ドゥヴィエルのすばらしさを力説した。それなら今月は「真の歌い手」というタイトルがふさわしいだろうか。ロベルト・アラーニャの歌を総座席数1000席強の小ぶりなチューリヒ歌劇場で、それもピアノ伴奏で聴けたのは意外にも最高の体験だった。

じつは、4つのオペラから二重唱とアリアを歌うプログラムを見たとき、「オペラをピアノ伴奏で聴く価値があるのか」などと斜に構えていた。ピアニストのマレク・ルシチンスキは確かに高い芸術性を有するが、独自の世界を創り出すことにたけていて、オペラのフレージングに反する弾きかたをすることも多かった。

それでもプッチーニ《トスカ》第1幕の二重唱でカヴァラドッシを歌うアラーニャは、第一声から心をつかむ輝かしい声と甘いフレージングが光った。長い息のコントロールも完璧で、これが聴けるだけでも幸せだと思わせる。アラーニャの夫人、アレクサンドラ・クルザクはトスカらしい声を上手に作るが、高音は軽く逃げてしまう。それでも声の焦点の当てかたは上手い。彼らのテンポは自由すぎてオーケストラでは不可能だろうが、1音1音大切に歌っていく。アリアは二人とも高音が危うかったが、それでも満足度は高い。

ピアノ・ソロのあとはビゼー《カルメン》で、ドン・ホセの〈花の歌〉を、アラーニャはまるでドイツ歌曲のように、焦点にピタッとはめた声で繊細に歌った。ミカエラのアリアは無難に、そして二重唱ではアラーニャの母国語、フランス語が美しく響く。

休憩のあとは、「子供に風邪をうつされた」と二人の不調を告げ、ヴェルディ《オテロ》を歌い始めたが、クルザクがヴェルディの歌い回しを理解してないようなフレージングで歌った理由にはならない。しかしオテロの最後のアリアでは立ったまま死んでいく表現ができるアラーニャのすばらしさを堪能した。

最後はチレア《アドリアーナ・ルクヴルール》だが、クルザクがアリアから譜面を見ていたのは興ざめした。アラーニャは、毎回歌い終わると聴衆が溜息をつくほど、声と歌い回しでみなの心を愛撫する。すべての音は、聴くだけで喜びを与えてくれるのだ。

病み上がりなのに精力的なプログラムを歌いきり、その上アンコールにはどんどん応え、その合間にも夫婦円満なサービス精神を発揮した。とにかくアラーニャの声は聴くだけで心を震わせる。本当に幸せな2時間だった。

アラーニャ（右）とクルザク（左）のリサイタルから ©中 東生

2030年前半をめどに増築予定のチューリヒ歌劇場

チューリヒ歌劇場は現在、歴史的な転換期にある。2030年前半をめどに増築を計画しているからだ。5月12日には歌劇場の従業員たち、そして13日には聴衆を招いてワークショップが行われた。このあと専門家や政治家も招いた討論会があり、6月には、オープンエアで大スクリーンに投映されるオペラを無料で観られる「Oper für Alle!」の際に、誰でも公に発言や提案ができる機会を設ける。直接民主制のスイスでは、計画が決まったあとでも、州民投票で否決されるとすべて白紙になる可能性があるからだ。現在60パーセントのスペースが不足しているという調査結果をもとに、この歌劇場を州民に開かれたスペースにしようと、歌劇場側も、そして聴衆も知恵を絞る姿が印象的な企画だった。

ソコロフのリサイタル

ホッホウリ・コンサート・マネジメントの招へいで、今年もグレゴリー・ソコロフのリサイタルが5月13日、トーンハレで行われた。今年のプログラムは、英国のチャールズ3世の戴冠式後にぴったりのパーセルで始まった。ソコロフの弾く数音で、聴衆はすぐにパーセルの時代、国にワープした。後半はモーツァルト「ピアノ・ソナタ第13番」で、ソコロフ独特の、聴衆を微笑ませる美しい音が際立ったが、最後の「ピアノ・ソナタ第3番」アダージョは、1音1音を愛でるように弾き、格別だった。ソコロフは機械的に出たり入ったり、お辞儀をしたり、を繰り返しながらも、7曲もアンコールを弾いたので、そのアダージョもアンコールに溶け込み、スカルラッティからラフマニノフまでの多様な世界観を繰り広げた。ショパンの《雨だれ》（前奏曲第15番）の展開部がとくに印象的だった。

ヘレヴェッヘ指揮トーンハレ管

チューリヒ・トーンハレ管弦楽団は5月10、11日、フィリップ・ヘレヴェッヘを指揮者に招き、ベートーヴェン「交響曲第7番」と、イザベル・ファウストのソロでブラームス「ヴァイオリン協奏曲」を演奏した。ファウストのヴァイオリンはあいかわらず知的な美しさだが、ドイツ人がブラームスで共演すると、こんなに「あうん」の呼吸であっさりしたアプローチになるのか、と意外に感じた。しかし古典派のベートーヴェンでも、バロック音楽のような指揮をするヘレヴェッヘには「第7番」の高揚感もなく、客席からはパーヴォ・ヤルヴィの棒を懐かしむ声が聞かれた。

そのヤルヴィが音楽監督として初めて訪日するツアーは、コロナ規制のために延期されていたが、10月にようやく実現する。次号の当欄では日本ツアーをふくめた来シーズンのプログラムに関する記者会見についてもレポートしたい。